

Case Study

支部ケース・スタディ

東京支部

地域住民の手でつくるローカル映画祭 「文京映画祭」との関わり

東京ケーブルネットワーク(株)

制作部地域メディアグループ

松尾 遼



「映画で広げよう みんなの輪！」

文京映画祭は全国的に募集をかける既存の地域映画祭とは異なり、文京区の住民(在学・在勤者を含む)により制作された映画を上映する試みとして始まりました。

「映画で広げよう みんなの輪！」をテーマに、2016年に第1回、2017年に第2回が文化シャッター株式会社の本社にあるBXホール(文京区西片1丁目17番3号)にて開催されています。

自主製作映画に加え、区が以前製作した映像作品や区にゆかりのある作品(第1回では文京区に本社を置く日活株式会社所有の「カップの三平」「どら平太」、第2回では彫刻家イサム・ノグチの母親であり、文京区に在住経験のあるレオニー・ギルモアを描いた「レオニー」)を上映、また幕間では地域住民によるダンスや漫才も披露されました。

映画好きな高齢者を中心に発足した「文京映画交流クラブ」代表の城石武明さんを中心に、主催・運営も区民の手で実施。また、会場提供に協力している文化シャッターほか、区内のさまざまな企業や組織がバックアップしています。



「文京映画祭」が開催されたBXホールのロビー



子どもたちによる舞台挨拶



客席には家族連れが

発足のきっかけ～文教エリアの特性を活かして～

第1回映画祭の1年以上前、区内で映画製作を目指しているシニア世代がいるという噂を聞き、北海道むかわ町で高齢者たちによって映画が自主製作された話も知っていたため、撮影技術などで何か手伝えることはないかと会合に参加しました。その組織が前述の「文京映画交流クラブ」です。文京区のソーシャルイノベーション事業で誕生した組織で、地域で引きこもっている高齢者のつながりをつくることを目的に、特別養護老人ホームや地域拠点で映画の上映+ディスカッションの会を展開しています。メンバー自身もシニア世代が中心となっており、映画好きが高じて自分たちでも映画製作をしたいという話でした。

同じタイミングで女性の多様な生き方・働き方を支える地域コミュニティのスタイルを生み出すことを目的に活動する「小石川ウーマンベース」にも出会いました。小石川ウーマンベースは小学生向けのイベントとして、映画が好きな高齢者たちとの映画鑑賞+お話を何度か開催している状況でした。この段階で「小石川ウーマンベース」も、映画という正解がなく独創性とチームワークが必要なものを小学生の心の教育として取り組みたい、という話があり、小学生による映画製作の話もあがってきました。

弊社エリアでもある文京区は、東京大学を筆頭に数多くの大学や研究機関が集まる国内有数の文教エリアです。このことから地域の大学生が制作した映画を一堂に集めた上映会ができないか、以前から考えていました。高齢者、小学生が制作する映画の発表の場として、大学生や高校生など区内学校の学生・生徒制作の映画も集め、全世代から公募する区民主導映画祭を提案したのは自然な流れだったともいえます。

地域住民と映像制作の橋渡し役として

映画祭に向け最初の企画として、2015年7月に多世代ワークショップを開催。以前、共同で番組を制作した東京大学大学院情報学環に協力を依頼し、メディア・コンテ(デジタルストーリーテリング)という、写真とナレーションで構成するショートストーリーをつくる手法での作品制作に取り組みました。シニア世代、小学生、ファシリテーターの大学生という多世代混成チームを作り、昔の文京区の写真と、ワークショップ中に新たに撮影に行った写真を組み合わせ、オリジナリティあふれる作品が完成しました。写真という目に見えるものと、自分たちの声で物語を作っていく作業は、これから自主製作映画を撮るシニア世代、小学生にとって大きな経験になるだろうという判断です。自分たちのアイデアを形にする、写真をつなげて見て聞ける作品を作るという楽しみを知る、というのが狙いでした。また、普段交わらない3つの世代が一緒になることで、ワークショップとしても純粋に楽しめるものとなりました。

今まで弊社で実施してきた事業や映像制作技術などと区民を橋渡ししていく、という意味で次に実施したのは、小学生向けの特撮セミナーです。弊社は高校生向け映画製作セミナーに協力しており、その中で特撮セミナーへの協力もしました。小学生が映画製作に興味を持つ入口として、特撮は大きな引きがあるのではないかと思います。縁を頼りに特撮映像監督に講師を依頼し、小学生向けの特撮セミナーが実現しました。

シニア世代による映画製作は残念ながら現時点でも動いていないものの、小学生による映画製作は第1回映画祭の4カ月ほど前に稼働し、直接講師として参加しました。第1回、第2回ともに約20人の小学生によって3本の作品が無事に完成。第2回参加者の半数が、1回目から続けての参加でしたが、よりよい作品作りをしたいという情熱があり、実際上映した作品も質が上がっており、映画祭参加者からもよくなったという声を多数いただきました。



子供映画教室では、子どもたちが楽しそうに映画製作にチャレンジ

パブリック・アクセスを目指して

区内の高校・大学から作品を募集するとはいえ、コネクションがなく、すぐには応募作品がありませんでした。小学生映画製作チームとして一緒に活動していた、小学生の保護者の方々が大学の文化祭で声掛けなどをし、ようやく数本の作品が上がってきました。

弊社では毎年フォトコンテストを実施しており、入賞作品を使ったイメージCMを制作しております。こちらのCMのBGMとして区内の専門学校の学生に作曲をしていただき、コンペをしています。この専門学校に映像学科もあるため、連絡を取り作品を出してもらうことにも成功しました。公募にまつわる映像データのチェック、納品や当日の進行、司会など地域の中の映像事業者として技術と経験を活かし、映画祭を影から支えました。映画祭を提案した目的は、エリア内に点在している映像制作者を認識し、それぞれを地縁というネットワークで結ぶところにあります。従来の、我々が取材をすることで取材対象者と視聴者を結ぶ形だけではなく、ケーブルテレビを通じて住民自身が制作者となり、地域情報を地域の人に届けるという形を目指しています。

文京映画祭のロゴが目を引き昨年度と今年度のちらし

